生花早満奈飛　七編　全

生花早学七編序

瓶に花さる事は古くより弖ぶりまてしかれど
後の世とありて師の山は繁りけり弖ひさぞ
みやびを流れ遊びとなれり湧ゆく業へゆく
大江世に四門の時乃於くいとど雪乃がも
咲出る千とせも花色香あれば其風情も
又異をとる一様なる渡さるも瓶に挿ん人乃
中ひを?めて此はこそ?れ志

〻流をくんきバ実ふ手綫とて引て知とし
はれバ此道を示しむ人乃聞しく深く
思ひとりて八千種れ花の色香を味ひなバ
容も自らんて叶ひ難しき風情も顕れ
なんとはずめんふめのさることに形辞

嘉永申和し
さ月秋の中旬

伊勢の
鬢長
志るす

生花早満奈飛七編目録

花衣桁畧図

立五尺 横五尺一寸

一書ニ此衣桁ハ石州流ニ用ゆる所也ト云

右も花の挿方ハ種〻の習ひあれども師によりて学ぶべし爰にハ只その大概をあらはす

○花を生る習ひハ草木ともに何によらず山野水辺の出生ニ背かざる様ニ心得るを第一とし陰陽四時の景色を宗とし其根元の乱れざる事とし

○花器ハ第一とり合を心掛べし譬バ白き焼物の花瓶へ白き花を挿る

時ハ面白からん又花瓶の長一尺あらバ木の長一尺五寸位までよし
然れども品によりて延すぐるも有べし其時宜に随ふべし
○菊の座ハ第一を白し第二ハ黄第三を赤と定むべし
○早咲の花類ハひらきたるを高く蕾を低く生じ盛の時節にハ開蕾
とも取合よく見繕ひ生べし終の花ハ蕾高く開花を低く生る事閑と△

△見ごしらふる心持にてひらきたるを
下とおきつぼみを上にいけるなり

衣桁の生方ハ
凡五瓶七瓶に限ルト云

同
此花衣桁ハ未生流の図なり
釣花いけの釘
左右を送て心にまかすべし
同上
同上
同上

茱萸袋形花器之図
黄白の菊ト茱萸を挿ビ
是ハ重陽ニ用ゆる生花之
茱萸袋トも云
中ニ入る花器ハ錫を以て造る
袋ハ赤地ニして結びの紐釣糸ホ紫を用ゆと云結び方両ニ在ゐ和合
結方ハ右雲上ニハ袋紐ともに緋ろまでゝ當流ハ五色ニ表し紫乃
紐も閉るもよし閉ゆ茱萸袋の故事ハ第五編ニ著ハせバ為て略ス
袋の図
右ハ錫ニて作るとふ
中へ入る花器の図

蔦ニ椿
蔦ハ凡二本以上七九本心ニ任スべし大佛柱手桶ホニ
巻つる時巻方ハ心の表より出し巻数ハ半ニすべし
連翹 水仙
二重切生様
中菊
七編
六
七

花器寸法大概　遠州流に用ゆる所之
一名相生獅子とも云
二重切ハ
惣長ハ一尺二寸
是を俗に
百度と云
底の
中
四寸五ア
登獅子
惣長一尺
後切
二寸
二寸余
鼎形
耳
惣長
一尺二寸
二重切洞
二寸
手桶
七寸
二寸
長袴
竹
惣長
九寸
達广
二寸
惣高サ
七寸

○竹花器七種飾付といふ事ありて花器に水を入れ花をも入れしく飾るべし○獅子口 床ぐらにかける○寸度 花臺にのせる○鮟鱇 花臺にのせる○手杵 同上○二柱 同上○橋柱 同上○二重切 すいぐらにて釣り口のくらにかける
以上七種なりしるぞ

○一説に竹の筒の花器ハ紹鴎までハ勝手の切溜入にてざしきへ
出されしハ曾てなくを利休までも同前なりしが豊公相州御陣の砌
利休彼地に於て侘の作意に竹の花器をこしらへ御茶を一ふくよる
此時竹の本にて一重切と一器末の方にて尺度切一器以上三器を
作る此一重切の筒にひゞきれ有由へ園城寺と号くなまハ三井寺の
鐘のひゞきれあるに准て銘とせしと寸度切ハ鳩胸と名づく鳩の胸に
いさゝか似たる所あるゆへとぞ小田原の地ハ総べて竹の名物にて今も
城山の後に大竹ありて見事なるものなりしといふ

園城寺

利休作

惣長曲尺にて一尺八寸一分半
節二あり廻り一尺二寸五分ト云

鳩胸

利休作

惣長八寸九分 下のふしより切留まで二寸六分
廻り一尺五分 上面より一寸五ア下ニ丸環を打

同作

惣長九寸八分

此る八ア

二寸二分

此る上六寸八分

後引残しのぞぎ二寸五分
上より八ア下に折釘穴 窓より後ろ
角丸にてひづく

宗和作

二ミ八ア

此る八寸 内一寸七分半 底の下之

惣長一尺六分

メシ内ノ方ニ二ア外ノ方ニアリ

切残し二寸八ア
釘穴上面より一寸下
竹いづれも平身なりといふ

宗甫作

惣長九寸三ア　後切の上巾二寸七ア　メシ一分半

釘穴　竪七分五リン　よこ四分

糸柳椿

椿のつぼみとそ柳のいれなる

○一書ニ一重切の筒寸法ハ凡廻り一尺の竹にて長さ一尺四寸切込ハ惣長の四ッ割一分の長さ

诸ヒ花ハ天をうけて下ハ地をうけ枝をうける所ハ心を

又ハ二寸五分或ハ二寸にても切るなり

折釘穴上面より一寸目を心として

長さ七ア横四歩

四割一分切込ハ上月の輪ハ残り二分の内の寸ニ入るなり

惣長一尺四寸　廻り一尺の積

○一重切釘穴貫通ニあるハ掛花筒ニ決ス半穴なるハ釘を掛と両用のなりあり切込ハ二寸四歩より五歩までハ獅子口と云二寸前後を姥口より四寸余ニ至つてハ鮟鱇ともいふ然れども凡て一重切と称て通用有し或ハ獅子口とする事ハ千家ニ限るなりともいふ

又すんど切ハ圍一尺の竹ニて凡長一尺二四寸節の下四寸ぐらゐ一名

○経筒ゆるひハ頭切ともいへり

○二足の筒ハ図の如く一本の足を前へ向べし左二足の花台を忌べし若し二足の花台を是非なく用ゆる時ハ筒の足を二本前へ向べし

橐吾

○葉ハ互ひ違ひて継にゆへすべし

○尺八切ハ竹の節凡そ二ツ三ツ五ツまでもあり利休の切しハ長一尺八寸五分にふし九ツありしよし真の尺八の心にて反より作を見立て切べし凡そ長ハ九寸より一尺位にても見合し竹の大小ニよるべし

尺八切

惣長　九寸七分

本の廻り　七寸

右宗甫の作

鐶付　上の小口より一寸五分下に鉄のくはんをうつ

一節切

惣長　九寸五分　竹の廻　五寸

是も真の一節切の笛のごとく小節を一ツおきて切なり是ハ一ふし成竹を見立て切べし節ハ中より少し下にある方よし小口より一寸五分下にて鉄の鐶を打裏にて折くぎ内より漆にてとむる　右宗和の作なり

○一説に花窓の寸法古来より一寸五分又一寸七八分とも云然れども是にてハ

花入ハ見物之故ニ大形ハ二寸までに切ものなりいづれも竹の見合せ第一なり後の切の口ハ古来より二寸五分といへど又めんの取やうハ竹の身比厚さ三ッ一分の口にて見立よし又めんの取やうも竹の身比方へ随分削皮目の方一分ばかりめん取て見立下にするなり

石州流竹花器寸法大概

達摩
洞二重
庸軒形
鶴首
高二重
櫓二重
螢
寿老人
旅枕

澪標
惣長一尺
角二寸
二寸
翁二重
惣長一尺三寸
猿猴の形
惣長一尺八寸五分
丹頂鶴首
惣長一尺九寸
花筐
竹のわをそてつくる
置筒
手桶
惣長一尺九寸
天地
立二寸横二寸
五分の丸
五重切
惣長一尺九寸
惣長一尺八寸
下の角打抜
二重切
惣長三尺
立二寸
横二寸ノ角

五重切

一名 五行とも云

上三重ハ前に記ス三重切に同じ第四の鱗ハ竪二寸あり

第五の下筒ハ常の一重切の法を以て切べしと也

近来石州流に此筒を用ひしとぞ

○右いづれも一尺まはりの竹より尺二寸まではこの法にてよし尺三寸より五寸まで八二歩づゝ増るあり尺五寸より八寸まで八尺四寸の法に二三歩ましあり又尺八寸より二尺八寸まで八五歩ましにてよし尤竹のかたち節のとゞこほりによりて増減のおもむき有れども流儀によりていさゝかづゝ違ひありといへども大概かくの法を用ゆべし

一書ニ云 三重切寸法

節ハ五節七ツ節いづれにても半に成ものにて切べし

上三重ハ上客相客と心得べしと云 或云 一重を真二重を行三重を草とし則これ竹筒の三体なりとぞ

○一説に五重切の筒ハ青竹の当座切なり書院の飾りを大客の花にはじ遠州侯の物好にて伏見の大寺にて庭前の大竹を即座に切せられ折節春の花のさかり有にまかせて木も草も交て抛入なり此図を世にうつして京の茶人秋乃草なる

白梅
水仙
芽發柳
薄色椿
青竹の節間長サ五尺八寸
床の壁ニ立添る薄板ニハ常の反木を敷く
男松
或若松を取らせて
いれるともよし

そろりせずて御目にかけしに此内に一色ハ花咲ぬ木の有べき事とて御傳へられしとぞ是によつて極めて五重の下の筒に八松を挿るを此花形の習ひとせらるとかや

○一書云延附又ハ拄隠とも号け七重或ハ九重に切し筒なりされバ冬暑の時節なれど天井の縁より地敷まで床の内一ぱいに立さるとかやとぞ[illegible]九ヶ所なれバ花七ヶ所なれバ花ハ五ヶ所挿るとぞ然れば黒谷の本堂においても内陣の両楹に専好の好をもて一對かけしを十夜の法事に南天燭を種しに生されたり然るを早くもうしろく本能寺の御影講に此趣向を用ひ造花の糸桜を挿て此方が前に黒谷ハ後なりと爭ひし事なりしが二本寺ハむかしより両楹乃掛筒なりて箔絵あるが毎年藤の造花を挿しけるを専好も夫によりて思ひつかれしなりとぞ

○一説に車僧と名付し筒ハ謡に浮世をバ何とも巡る車僧まゝ輪の内に有とあるを見れトそ此哥を以て切し筒なり只常の口乃所にて竹は太くあれど丸く明るなり上ハ節をとめて打ぬかれたる其窓に花何にても一輪行義よくいけ其枝を外へ差出して又一輪と答と云ふべきまゝ輪の内にはなりたるといふ心ことぞ

○一輪ハ丸の中にそそ生る云

○含秋とつると花ハ丸の中にハしらひを入るト云

○油筒油さしハ船に准ずるよし、くだり出船入舟の差別なく又艪花を
あらはすどいふてなしとぞ是ハ利休居士のはじめて好むところと云

○律管これハ宮家の御好みのよし楽器の調子を合る
笛より思ひ付せの人物数寄とぞいふ此ハ竪に
用ゆる事もあり竪にする時ハ管の高きを
向ふに置前下りにすべし

右是ハ伐溜同前の品にて
独楽に種々の花を取入生るに
露をうちかけたるハ涼しくして潔きよし座敷の生花にハ用ひだいと云

○畚風の趣向ハ千利休の奇作なりし是ハ鞍馬山にて遊石を笑て
畚に二とじの綱を付谷を隔て遥かの山上より亂れひかうに流れを
かくどりて挿しとぞ薄板のかはりに円座を用ひられしハつよく
奇作なりしと賞せしとなん

畚風花形

此一輪と畚の形なれ

一説に此趣向ハ紫銅の舟に極るとぞ斯ハそろひ迎るりといふ

○或云不風流の人桜の絵の軸物をかけて遠州侯へ花を挿めされと

所望せしかバ壷に水を入て差出しゝぞ是早速の奇作也
或寺院へ諸侯を請待しけるに御遠慮の訳ありて御出なく花見あらバと有し由実めし思ひ御花見のつゐでに御立寄有べくと定かりしかバ池之坊に立花を頼まれけるに畏りて草木よろづの花一も用ひバ皆深山木なく一瓶を摸せし草留に桜草と三輪差ひしぞ御客も御感心ありしとかや是前よりの桜の掛物に壷をかり水をいれて差出しと同日の論なりし

○昔菅谷何某といふる士牽牛花を愛し路次より書院の庭のかぎり是を植て楽しみける或大守聞し由見物に御越あるべしと仰せられけれバ菅谷御返答にいかゞ大守なる御身として僕ごとれの庭の物数寄なるに朝顔など御覧に御成有んハ然るべからず万一茶の湯に御成など仰出されなバ忝しとハんと申せしかバ大守実にも思し由御使者を以て菅谷茶道の達人と聞及ぶ明日朝茶湯に御成なるべしとありしかバ菅谷かしこまり由領掌しける扨その朝向一本も残さず皆掘すて待受するに大守ハ早天に入せられて此ありさまに甚御不興なりしが夜るに館もいらずもあれバ是非なく数寄屋にいらせられしに大きなる金竜の花生に今朝向の花数十輪蔓葉凡四五尺ばかりなるを床の内一ぱいに生置されバ大守大ひに御感心ありて御褒美ありて御中立なく御茶同座に開し召りるに花猶さかりなれバ殊更興を増りまして世上に朝

皃の茶の湯と名誉に沙汰ける此時の事ありて一書に見へけり
按に豊公利休の宅に入せ給ひし朝㒵の説も是に相似たり双方別におもし事にや後世傳へのゆるや其是非をしらず

虚瓶之図

右遠州侯の奇作なり人悉しくハ前に記れ

瀧見の観音の掛物に例の水瓶に柳投入しるバ古人斯のごとくせしごとく花器も水瓶にして態取合てあり一色奇作なれ

○逆風鈴の花器ハ堂塔の檐にかける宝鐸を逆さまにして鉄の鎹を以て釣あり大徳寺玉舟和尚松に白藤をつかせ生られしとぞ

○子持筒ハ大小の竹を
根がらミにてつかふ
長短ハ
切
有楽斎の物好より
はじまるといふ

金絲桃

長春

旅枕ぐさ

朝白

梅
ちんの幹ハ前へ出ぞ
半より枝先うしろへのぞむ
体のえだハちんとうけて前ニ有

朽木ぐさ

朝白ハ枯枝などにかゝらせて挿べし
水ぎハニ花一つまん
必いるべし

茅島
鶴首
射干
寿老人
檜扇の
しだれ桃
金銭花
紺菊

剪春花

朽木船

狗子柳ハ川柳にして又猫柳ともいふ

狗子柳

槖吾

山茶花　錦木　小菊

櫓二重ちかくハ時によりてハ上の一重を休ミても但しかくれ水なり ありとくじ花もそのまゝなハ

二重の生やうにすべし

○一説に二重切の上の輪ハ香爐を画くかたち也故に見ぐるしきを嫌ふ勿論の事也又木より草を高く生るハ時宜によりて苦しからず萩の類長じてハ木よりも高く薄の本の小松も出るなどし谷に横たはりたる木ハ草よりも低し定家卿の哥集に

夜山の岩に草まとふけしきと知られ流素尺も小松ハしるゝぞ

○又釣花器掛筒掛籠の類に草花を挿ゆ筒の類ハ木の花も類ひとする時ハ峯の草谷の木とて心あり此花を高く生る事古歌にて

武蔵野ハ草に枯して詠むれバ冨士よりたかき常夏の花

○又水辺の草を木より上に生る事ハ山の頂上に池ある心を以て生べしされど其草ハ差別あるべし

○葉びらりの品を生る時ハ心を以て花とし然し容位の花にハ生べからず

○一説に経筒の花器ハ佛事に用ひ祝儀に用ひべからず

○はゐるものに花を挿るときハ口を上座にして生べし

○竹を生る花器ハ鉄焼物のるい或ハ瓢よろし

○手ある品に花生る時ハ花を挿るなら手を持歩行あるゝ持べし手を見切れバ持てあそびがたし

○輪なしの二重切ハ花を生る時上へ花を挿ば水ぞらり入れ無事ハ容を花と見る心ともいひ又容に花を入させん為なりとも云四季ともに上ハ水ぞらり入れ下ぞらりに花を生るもあり上へも生る事有時宜によるべし

○惣じて花を見るに床の脇よりみる事を謀てよく花を生るハ見づらく

○浮花沈花

浮花とハ事ハ其始
落梅浮澗水より
詩の心よりて故人
梅花を広き砂盆の
類の水に浮めるよりして
夏日炎暑の砌ハ水盤に
石竹の類ひ小輪まで兼じれ
花を五七輪水上に浮め
客前に於て賞翫すれ

砂盆六亀の図

一尺五寸

二尺

廿ヲ三尺

惣高サ足トモ七寸五分

足一寸 四ツ足

惣地紋 五歩ノ亀甲

五歩二歩の花の形釣合を大事とする也 些にても眼にかゝる事ハ
不作法なり亭主馳走の心をはかなくせし事なれバ花形をさらりと見
る八残念之容なりて八第一床の内に気を付べき事肝要なる哥に
床へ向ひ後へ退るこそかんかんにくれ〳〵に向て縁をあてゝよ
生てあくもと花数をよく見之同人のかゝバめをかくされよ

○花器を拝見する時ハ花器の口の内と
底へ手をまろとつけて見るべし
花器の外へ手をはなすことを
きらふなり右の手と上左の手
下よりすべし相客へ花器を渡す時ハ表を向て下に置てわたすべし

是を浮花とも又浮花とも古哥に
五月雨に沼の岩がきれぬとて菰かるべき方もしられず
と詠る心なりとぞ五月雨の頃萍蓬の花を沈めて生る也紫羅
欄牡若の類ひ多しとぞ皆水中に入る時ハ花を損じ萍蓬独り
水中にて花尚いさぎよし
○花を挿るに花配ハを用捨すべし心得あり唐物和物ともに名
器磁器塗物などハ多分花くばりを用ゆべからず但し花によりて
水際のさびしき時ハ是非なく配木を入る此時ハ花器に損ぜぬ
やうに紙をもつて緩く入べし
○曲留図式

太蘭　小刀留
ふとゐを張くべきものハ小刀のごとく削りて
結びて小がたなを差げさんのおびそおりしと留むべし

鋏留図のごとし

偕老草

木をもつて堂のかくれのの八分のごとくこれを
ほそきもよりてまけひらきておりをおくべし

椿

撃尺留

早満華道 七編 二十六

○一說ニ小柄生の始原ハ織部公利休方へ茶會ニ御出ありて會後庭前ニ見事なる太藺ありけるを御覧じて賞翫ありしかバ利休其太藺を切來りて織部公へ花を御所望申ける花器ニハ會席の太鞁食次を出しける織部公さらバとて小柄ニて太藺弐さし貫き小刀の鋒を出し食次へ差こミ御生ありしとぞ利休大ニ感心し奉りしとなん又利休の小刀挿とハ花切の小刀ニて右のごとく生しよりあり是小刀つけの濫觴なりと云

○同小柄の笄どめハ織部公遠州公へ御出ありて會後遠州公御なぐさみ有けるハ床ニ生し後ニ梅小柄留ニいけし後て然るべからずと仰られけれバ宜しかるべしと御答ありしより其後遠州公様がられ有し黒塗の盥へ小柄ニて梅を差貫きながらその鋒を盤へさし込押へニ笄を直の上是小柄笄留の始めとぞ

○又書生ハ織部公御慰ニ椽側ニありし黒塗の盥へ

蒲と菖蒲花を書て挿のふより始るは右の書ハ盥へ入たるばかりにハ外へ出しまじとぞ後世書の組方を工夫し其形によりて名を崇らせり右書ハ小柄なれバ小ハ貴人請待の席にハ遠慮すべし古昔ハ花器をそのまゝ花留などいふ具も調ハざりし事斯のごとし追て工夫をめぐらし今のごとくなれハ備へおくべし

扇留

○扇どめハ地紙花器へからみ用ゆるなど
二種挿なるハ成だけ一種にて
二本か三方よし三本にあれバ
水際小平身つきよろし
右扇留とこじめ小柄笄壓尺
鋏子留ホつゞまる畢竟早速の
座興にして活花の本意にハあらざれバ
好みて用ゆべからず豫て心得おくべき
若道具なり合せざる時の役けるなり

衘の全圖 再出

○衘とハ 口の中の勒をいふ
○鑣とは 衘の外の鐵之
一筒を一掛或一口といふ
衘の組方ハ原来遠州家の
秘儀なりしが近来諸家に
もちひて用ゆることあれり
然れども表にハ忌べきなし
右組方四十八種の習ありとし

畧して其名高きものをあらはし出す　流義によりてこれを用ひざるもあり

○銜組方の図

○男亀ハふたつの頭を前にそろへ
並べて行羽と両方打重ね
双方内の方の穴を揃て
重ねし此穴へ手綱掛と号
行違ひに入て双方へ張せて止る

○女亀の組方ハ男亀に同じく
頭を両方へ引違にして重ねる
手綱かけハやはり男亀の通りに穴へさしいれる
只頭を行違にいれるのみ

○海老ハ図のごとく
銜の尻を重ね合せて此重の
穴へ一方ハ手綱掛を行違ひにて
つらね一方つゝハ含金を出して海老の
足とし此組方ハ巾広く亘道付て用てよし

蟬

○蟬と号る組方ハ男亀を其まゝにして含金を前がゝりて前にたらし手綱うけを其まゝより後へ引なり

○蟇と号るものハ女亀を蟬の如くに含金を前にかゝらぬ手綱うけを後へ引く

○蟹ハ左こ図するごとく轡を斜にかさね手綱うけを二ツ中の穴へ入扨含金を前へかけて此含金の穴くなづなうけの先を入て留る甚ど堅くして花を入るによし

○御幸とうかるハ轡の頭を前に横にして打合せ手綱掛を行違はせて下よりし含金を以て押へ堅むるなり凡御所車の形あるをもつて御幸と号るなるべし

蟹

冨士の影

御幸

○不二のうけハ銜の頭を打違はせ含金の穴に此頭を入るに手綱うけの口ハ両方の轡の下打ちがへてさすべし是ハ薄鉢などのうすきものに入るに水中に蔵てよろしき

組方ありむかふにつかうて組むべし

双亀

○双亀ハ図のごとく向ふに出る亀ハ己が手綱をもつて後のかめの首にかけ後の亀ハ己が手づる掛を以て己が内の横腹にかけてちまを止る

○銜を繩にかけまはして組ける時ハ左右ふりかへて繩むべし

○草物葉物を生るに一本づゝハ入べからず大てんに花のふりを見て葉もだんだんに重ね一摑にして穴に挿べし然らざれバ銜ゆるみ安し又挿まがしあしかれども一摑りしすハ風流乃景出来ざる事あり此時ハ先ゆるみに花ももちまた葉もあれ胴体に過半入をそへて穿をかゝる夫よりだんだんに模様を付べし銜ハ全く鋳つけし龍蟠の類ひにかぎれ細くるくとのあれバ其心得あるべし又木物ハ蟬の組方のおとれ小穴ある銜に入まてよし魚道ハ海老のごとくそぞ廣き繩方よし

○銜ハ穴大にして花詰まりかぬる時ハ見えざる所へ込をと入べしいるいハ股に入て切株の体に見せるもよし然れども額にてあしらふを入ざるれもあらハ色時の宜しきに随ふべし

○縁がはあしらひて風のあたり強き所にてハ穿を堅く組て花も随がふかく挿べし頭重さの長高さの用捨もすべし

時によりて花勝て保ちがたきハ大の盤を以て上よりおさへとむべし御幸の組方など八甚だ堅からずしては保ちがたし随分かろきものを入重きもの八入べからず

○行書にハ手綱掛行一方など専らとりて此外の組方なし又其時に当るまで勝手に止べし

尚此に洩る秘事口傳ホハ第八編に委しく出ス

生花早満奈飛七編 畢

攝滄 鷄鳴舎曉鐘成編輯

生花早學 自初篇至十篇 都合十冊 成刻

嘉永四年辛亥六月發兌

書房 大阪心齋橋筋南久寳寺町 伊丹屋善兵衛梓